

氏 名 寺 井 俊 正
 学位の種類 博士 (文 学)
 学位記番号 論文博第 466 号
 学位授与の日付 平成 16 年 3 月 23 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 2 項該当
 学位論文題目 「あいだ」の世界
 ——初期ホーフマンスタール文学の基本的構造——

論文調査委員 (主査) 教授 西村雅樹 助教授 松村朋彦 教授 宮内 弘

論 文 内 容 の 要 旨

ホーフマンスタールの文学を全体として概観したとき、その際立った特性として認められるのは、この文学がさまざまな二律背反的対立から織り成されているということである。たとえば、存在と生成、個人と社会、美と倫理、言語魔術と言語懐疑、プレ・エクシステンツとエクシステンツなどの対立である。また、この対立は作品の形式面にも及んでおり、詩・小説・戯曲での前半から後半へと反転する作品構成に現われ、あるいは抒情劇では抒情的なものと劇的なものの対立として、ジャンルの構造自体を規定するものとなっている。そしてこうした対立は、ホーフマンスタールの文学では、文字通り二律背反的なものであり、そのいずれか一方に収斂されることがない。この詩人の文学世界はその意味で、いわば相反する二項に引き裂かれた分裂の世界であると言えよう。このことはしかし、この世界が無定見で統一性を欠いているということではない。むしろさまざまな相反する二項の分裂が不断に呈示されるその世界は、その相反する二項を共に肯定し、分裂そのものを積極的に肯定する世界であると言ふべきである。換言すれば、この詩人の文学世界は、相反する二項の分裂それ自体に、あるいは、相反する二項の「あいだ」に、その固有の「場所」が置かれた「あいだ」の世界として捉えることができるのである。

ところで、従来のホーフマンスタール研究では、こうした二律背反的な対立はもとより当初から注目されてきたところであり、たとえば美と倫理、言語魔術と言語懐疑等々の局面において数多く論じられてきた。しかし、多くの研究では、個々の局面での分裂の様相は考察されても、それらの局面を分裂の世界という総合的な観点から見るような考察は希薄であった。またそうした研究は、相反する二項の対立を、最終的に統合されるとするか、そうでなければ統合を欠如したものとして否定的に解釈するかのどちらかで、分裂を分裂として積極的に捉えるような視点をほとんど欠いていたように思われる。本論文は、そうした中で、さまざまな局面で現われるそれらの対立を、基本的に個別的次元の生と個別化以前の次元の生との対立へと還元すると共に、ホーフマンスタールの世界をその分裂が肯定される「あいだ」の世界として、統一的な視点から多角的に考察しようとしたものである。

なお、本論文の対象は、『手紙』(1902年)の頃までのいわゆる初期に限定するが、それは主として以下のような理由に基づく。この詩人の文学は、初期から中・後期を通して「あいだ」の文学として一貫していると考えられるが、しかしまた、この文学が初期における抒情詩や抒情劇中心の傾向から中・後期における演劇やオペラ台本中心の傾向へと大きく変化していることも確かである。この変化は、「あいだ」という観点から見れば、個別的な生と個別化以前の生との「あいだ」の磁場の後退として捉えられるものであり、個別的な生の肯定が全面に出される中・後期よりも、二項の背反・葛藤を呈示する初期の方に、その磁場はより強く働いているとしなければならない。また、個別化以前の生を幼年期に置き、社会的意識の確立した個別的な生を中・後期に置くとすれば、初期は時期的にもまさにその「あいだ」に位置していると言えよう。こうしたことから、本論文の対象をとりあえず初期に限定したものである。

本論文は六章から構成されている。各章の要旨は以下のようなものである。

本論文の序にあたる〈第一章〉では、まずホーフマンスタールの文学が「あいだ」の世界であることを示した上で、その「あいだ」が個別的な生と個別化以前の生という19世紀末の「生の哲学」におけるような生の二つの次元の「あいだ」に還元されうること、またその意味で、実体的な二項を前提とした消極的な規定としてではなく、存在論的な差異として考えられねばならないことを指摘している。

〈第二章〉は、19世紀末当時の精神的・文学的状况一般を振り返り、そのなかでこの詩人の「あいだ」の世界がどのように位置づけられるのかを概観している。この世紀末は、精神的には、近代的世界像とその主体たる近代的自我の虚構性が露呈され、それと共に、一切の形而上学的根拠を欠いた混沌とした生成変化の現実が開示されるに至った時期であるが、本章では、そうした状況を確認すると共に、当時の広範な思潮の一つであった「生の哲学」とニーチェの芸術形而上学、そしてその影響の下に当時のウィーンの文学界で支配的であった唯美主義的・印象主義的傾向を挙げながら、ホーフマンスタールの「あいだ」の世界がこうした精神的ならびに文学的状况との密接な関わりの中から生じたものであること、とりわけ詩人自身が深く関与していた唯美主義に対する、いわば絶えざる自己批判を通して形成されたものであることを概説している。

〈第三章〉は、習作期という、この詩人が文学創作を手掛けつつ、しかもまだ独自の表現様式を獲得するに至っていない準備的な段階—1890、91年の二年間—に焦点を当てて考察したものである。この詩人を空気の精アリエルのような存在とする、かつての伝説は、もとより伝説にすぎない。詩人は「移ろい」というニヒリズム的状况と直面するところから出発したのであり、この習作期は、そうした状況にあつての自己の生と文学をめぐる模索の時期に他ならなかった。本章では、その模索を跡づけながら、特に『覚書』に記された「分節の解消」と「分節への志向」という二つの相反する言葉をキーワードとして、すでにこの習作期において、「あいだ」が固有の「場所」として見定められていることを論証している。

本論文の一つの中心をなす〈第四章〉は、初期の文学作品の内、いわゆる抒情劇を考察の対象としたものである。特に抒情劇を対象としたのは、このジャンルが抒情詩と並んで初期文学の中でもっとも中心的な位置を占め、かつ詩と劇のまさに「あいだ」のジャンルとして、「あいだ」の世界をもっとも明確に窺わせているからである。なお、本章における「あいだ」の世界の考察では、次章の〈第五章〉が言語のテーマに即しているのに対して、主体のあり方もしくは自我分裂が中心となる。

本章第一節で取り上げる1891年の『昨日』は一連の抒情劇の嚆矢をなすと共に、ホーフマンスタール文学全体の処女作とも目される作品である。この戯曲は、最初に「昨日は自分と何の関わりもない」と主張する主人公アンドレアが、最後はその逆の主張へと反転する構造を示しているが、そこでは、この過去に関わるテーゼのほかに、他者に関わるもう一つのテーゼが存在している。本節では、この二つのテーゼが他者と過去からの限定としての個別的自己の問題として一つに収斂しうることを指摘し、この戯曲をそのような個別的自己の否定から肯定への反転を示すものとして捉えた上で、この反転がしかし作品ではイロニーに描かれていること、作品全体が示す自己のあり方の真理は、この反転の「あいだ」、個別的自己の否定と肯定の「あいだ」に置かれていることを論証している。

本章第二節は、1897年の『窓の女』を考察したものである。この詩人の抒情劇は1891年から93年の三年間と1897年以降の数年間とに集中しており、いずれにおいても自我分裂がテーマとなっているが、最初の三年間の戯曲では、個別化以前の生への一方的な志向に対する批判に重点が置かれているのに対して、1897年以降の戯曲では、逆に個別的な生が硬直化した局面にも改めての批判が加えられている。本節では、『窓の女』に即してそのことを考察し、個別化以前の生との一体化を志向するディアノーラの悲劇が、夫ブラッツィオに体现された社会的制度における抑圧と疎外がもたらした悲劇でもあったことを論じている。本節ではまた、この戯曲に本来添えられるはずであった『プロローグ』を検討しながら、そこで語られた南チロルの少数民族の中に、この戯曲における詩人の本来の視座があったこと、そしてそのような視座のもとに、ブラッツィオが示す抑圧的な制度も、その反動としてのディアノーラの志向も、共に他者的なものを排除する近代社会の問題として相対化されていることを論証している。

本章第三節は、ジャンルとしての抒情劇の基本的な構造を明らかにすると共に、この詩人の抒情劇の全般を改めて「あいだ」の世界として概観したものである。世紀末の抒情劇は、近代劇の挫折の中から生まれた劇形式であり、近代の劇が個別的世界における自律的な主体と主体の対立・葛藤から成り立っているのに対して、抒情劇ではそうした主体の解体と共に個

別化以前の外なる領域が開かれ、個別的世界の全体がこの外なる領域と対置される。抒情劇はしたがって、個別的生と個別化以前の生との対立・緊張関係そのものをその基本の構造とするものであり、ホーフマンスタールの抒情劇はこうした構造をとりわけ顕著に示すと共に、そこではこの構造自体がこの詩人の根本テーマの形式的表現となり得ている。本節では、こうした考察を踏まえた上で、この詩人の抒情劇全般を概観し、そこで呈示されるのがいずれにおいても融和なき対立であり、主体の分裂であることを論じている。

本論文のもう一つの中心をなす〈第五章〉は、「あいだ」の世界を特に言語の側面から考察したものである。「あいだ」の一方の項である個別的生の次元は言語と不可分な次元であり、「あいだ」は、その意味で、言語と個別化以前の生の「あいだ」でもある。考察の対象は初期の言語論と詩論であるが、それらの検討を通して、抒情劇では必ずしも明確ではなかった「あいだ」そのものの構造を明らかにすることが本章の主旨である。

本章第一節は、初期の言語観を、ある『覚書』の中に記された「転移」という概念をキーワードとして考察している。『手紙』に述べられたような言語批判は初期を通して認められるものであり、「移ろい」の認識に基づくこの詩人の言語観は、何よりも、言語を形而上学的ロゴスの反映・再現とする伝統的な言語観の否定の上に立つものであった。本節では、はじめにそのことを論じた後、改めてこの詩人にとっての言語と生成変化の現実との関係を考察し、その関係が「転移」という別な次元への変換として捉えられていること、そしてその「転移」がすでに根源的生からの感覚的領域への湧出において認められるとすれば、言語はそれを引き継ぎつつ、さらに理念的意味という別な次元へと「転移」する媒体とされていることを論じている。そしてその上で、こうした「転移」が、この詩人においては、原文の不正確な反映・再現ではなく、根本的には、原文のない翻訳として、すなわち「転移」されるものの新たな可能性の開示でありそれ自体が独自の現実の創造として、肯定的に捉え返され、そしてここに詩的言語の可能性が開かれていること、しかしまた、この原文のない翻訳という見方が一唯美主義的言語が示すように一言語的世界の開示を真の生とするプラトニズムに墮する危険を孕んでいたのに対して、この詩人においては、そうした開示がつねに開示されるものの隠蔽を伴うものとされていることを論証し、この詩人の言語観の核心が、そうした開示と隠蔽という「転移」の両義性のなかに存在していることを結論づけている。本節では、以上のような考察を行うと共に、改めて、個別的生と個別化以前の生との関係がこうした「転移」の関係、すなわち個別化以前の生がそれ自身と隔たりにおいて現出する自己差異化の関係であり、「あいだ」とはこのような「転移」の動性に他ならないことに言及している。

本章第二節は、前節を受けて、特に詩的言語観もしくは詩論を考察の対象としたものである。テキストとして取り上げたのは、初期詩論の中でももっとも本格的かつ綱領的に論じられた1896年の講演『詩と生』である。詩人はその中で象徴主義的な詩学と軌を一にしながら、詩とその外部たる生との関係について、詩の生からの自律性を主張すると同時に、「作用」を介しての生との結びつきを主張するというパラドクシカルな論を展開している。本節では、このようなパラドクスが「転移」の媒体としての言語観に基づいていることを確認し、その上で、既成の言語体系の組み換えによる感覚的現実の再構成というこの詩人の詩的戦略と、そこにおける「作用」＝「読み」の本質的な機能を検討している。そして、象徴主義の逸脱したあり方としての唯美主義的傾向に対して、この講演で言語的形象の可変的多様性が対置され、言語体系と生との異他性が主張されていること、そうした詩と生との開示と隠蔽というどこまでもパラドクシカルな関係の認識に、この詩人の詩観の際立った特色が認められることを論じている。

本論文の締めくくりにあたる〈第六章〉は、1902年の『手紙』を考察したものである。本章では、はじめにこの『手紙』をめぐる従来の論議に触れ、まずチャンドスの危機が言語の危機が主体（意識）の危機かの対立に関して、言語と主体のこの二つの問題は、ここでは文筆家としてのチャンドスにおいて一つに収斂されていること、次に伝記的解釈と虚構としての解釈の対立に関しては、虚構性が重視されねばならないと同時に、詩人自身のアクチュアルな問題意識が重ね合わされていること、換言すれば、この作品の世界が17世紀と19世紀末の二重の精神的状況を交錯させていることを指摘している。本章では、その上で、チャンドスの〈危機以前〉と〈危機〉と〈至高の瞬間〉について、それぞれ二重のレベルの読みを試みながら、この作品では、19世紀末の唯美主義における言語的形象の絶対化が17世紀の近代の始まりにおける観念・表象の絶対化と重ねられ、唯美主義的なあり方が、広く近代の主体のあり方—その表象の絶対化と他性の欠如というあり方—として包括されていることを論証し、〈至高の瞬間〉における「あいだ」の原初的な生起の体験がそうした近代のあり方全般

に対する批判として呈示されていることを結論づけている。そして、この『手紙』の書かれた時期を考慮しつつ、この作品において詩人は自らの初期の文学を振り返りながら、「あいだ」の「場所」を、近代を超えうる可能性の「場所」として改めて確認したものであるとして、この『手紙』を意義づけている。

以上のように、本論文はホーフマンスタールの初期文学世界を個別的生と個別化以前の生の「あいだ」の世界と捉えて、その諸相を主体と言語の二つの側面に亘って考察したものである。言語論に見たように、「あいだ」とは生それ自身の「転移」の動性であり、個別的生と個別化以前の生は、開示と隠蔽の両義的な過程にある関係として、そのいずれもが現実であって、いずれにも還元されることがない。二つの生に分裂したこの詩人の「あいだ」の世界は、その意味で、このような「転移」としての生それ自体に対して「正当」であろうとする世界であると言える。詩人の中・後期の展開は、このような「あいだ」の自覚の上に立っての、個別的世界の決然たる肯定へと向かうものであり、しかしまたそうした肯定が、たえず辿り直されるべき個別化以前の生との「あいだ」を次第に硬直化していることは否めないが、ともあれ、その根底においてこうした「あいだ」を固有の「場所」とするホーフマンスタールの文学が、詩人自身が『手紙』で示唆しているように、近代の主体性の文学に対して、以後の関係性の文学の地平を切り開いているものであることは確かである。

論文審査の結果の要旨

19世紀末から20世紀初頭にかけての世紀転換期オーストリアの文学者フーゴ・フォン・ホーフマンスタールの研究に関しては、1950年代から70年代にかけてのものとの間に相違が見られる。概して言えば、かつてはホーフマンスタールの作品そのものを論じる傾向が強かったのに対し、最近の研究ではホーフマンスタールの文学を美術等の領域と関連させて扱う傾向が目立つようになってきている。

論者の研究は、この作家に関する最近の一般的な趨勢とは異なり、ホーフマンスタール文学の核心にあたと論者がみならずテーマについて、すでに定評のある説の見直しをはかろうとするものである。アレヴィン、ヴンベルク、ターロト等のホーフマンスタール研究史上の主要著作ならびに近年のヴィートヘルターの研究書等で述べられている説を踏まえながら、それらを批判的に扱い新たな知見を打ち出そうとする努力が本論文には見られ、扱おうとするテーマへの論者の内発的な関心が窺われる。

ホーフマンスタールの文学においては、相対立するもの、矛盾するものが並存しているということは多くの研究者により指摘されてきた。ただし従来の研究では、相対立するものの並存を肯定的には評価せず、最終的に統合へと至る段階と捉える傾向が強かった。それに対し論者は、相対立する二項の分裂を分裂のまま積極的に評価し、その対立・分裂の関係を探ろうとする。さまざまな局面で現れるこの対立を、論者は、「個別的次元の生」と「個別化以前の次元の生」との対立へ還元すると共に、両者の関係を「あいだ」として捉え、それがどのようなものであるかを明らかにしようとしている。

第一章では、序論として、論者がホーフマンスタールの文学に見出そうとする「あいだ」は、実体的な二項を前提とする固定したものではなく、対立する次元がそこで初めて開かれる関係性として捉えられるべきだということがまず述べられている。

第二章では、以下の論の前提として19世紀末の精神史的状况が記述されている。論者はこの時代を、近代的世界像の主体である近代的自我の虚構性が露呈され、超越的根拠を欠いた世界の様相が開示されるに至った時代とみなしている。

第三章では、習作期の作品が扱われている。この時期にすでに見られる「移ろい」という表現を、論者は、無常観の表明ではなく、絶対的根拠を喪失したニヒリズム的状况を表したものと解し、そのような状況下にあつて、相対立するものの「あいだ」がすでに問題にされていると受け止めている。

第四章は、ホーフマンスタールが初期に取り組んだ主要ジャンルの一つである抒情劇の考察にあてられている。一連の抒情劇の嚆矢をなす『昨日』がまず取り扱われ、この作品に見られる、時間の内にあり他者との関係に置かれている自己は、時間と他者から共に限定される個別的自己として一つに収斂することが指摘され、作品全体が示す自己のあり方は、個別的自己の否定と肯定の「あいだ」にあることが論証されている。続いて『窓の女』が取り上げられている。論者が見るところでは、『昨日』に代表される時期の戯曲では、個別化以前の生への一方的な志向に対する批判に重点が置かれているのに対し、『昨日』より数年後の時期の『窓の女』をはじめとする戯曲では、個別的生が硬直した局面に対する批判も加えられて

いる。『窓の女』においては、硬直した個別的生は社会制度に関わる抑圧と疎外としても問題にされているという。この二つの作品についての考察の後にさらに抒情劇という劇形式の構造が論じられている。近代劇が個別の世界における自立した主体と主体の対立から成り立っているのに対し、ホーフマンスタールの抒情劇は、個別的生と個別化以前の生との緊張関係そのものを基本構造とすると論者はみなしている。

第五章では、個別的生と不可分の関係にある言語についての考察を通して「あいだ」の世界が解明されている。論者は、初期の『覚書』の中に記されている「転移」という表現に着目し、ホーフマンスタールにあっては、言語と現実の関係は「転移」という異なる次元の間での変換として捉えられるということ、「転移」にあたっては独自の新たな現実が創造されること、その際個別的生に開示される根源的生は開示されると同時に隠蔽されること、「あいだ」とはこのような「転移」の動性に他ならないことを跡づけている。これは、ホーフマンスタールの言語観についての新たな理解として評価できる。論者はさらに、この言語観は詩論『詩と生』においても見られるものとし、自説の裏付けを行っている。

最終章の第六章では、『チャンドス卿の手紙』が考察されている。一般にはホーフマンスタールが初期と訣別し新たな時期を画した作品とみなされることが多いこの作品を、論者はむしろ初期と深いつながりを持つものと捉え、チャンドスの至高の瞬間の体験は、本論文で論じられてきた「あいだ」の原初的な生起の体験であるとし、近代のあり方全般の見直しに通ずるものと、注目すべき見方を提示している。

ホーフマンスタールの文学を、二項の対立の「あいだ」として論じ、その「あいだ」を動的関係性として捉える本論文は、ホーフマンスタール研究にあたっての新たな視点を示したものとして高く評価できる。本論文ではホーフマンスタールの初期に限定して論が立てられているが、中・後期に論を展開した場合、「あいだ」はどう捉えられるであろうか。論者のさらなる論究が期待される。問題点を指摘するとすれば、抒情劇や詩論については十分な考察が行われているものの、抒情詩があまり取り上げられていないという点が挙げられる。ただしこれは本論文の価値を大きく揺るがすものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2004年2月19日、調査委員3名が論文の内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。